

## 大八洲開拓農協に大水害

昭和五十七年八月一日午前〇時頃渥美半島に上陸した台風十号は、翌二日午前四時頃富山湾に抜けた。日本列島中心部を横断した大型台風により死者行方不明八十名余という犠牲がでた。明治四十二年に建設された東海道線富士川鉄橋では下り線の橋脚が流された他、各地の道路は寸断され交通網は大混乱を来たした。これらのニュースは詳細に伝えられたが、「遊水池」にある農地の被害は余り伝えられていない。

利根川右岸の利根土地改良区八百ヘクタールと左岸の菅生沼改良区約四百ヘクタールは溢流堤を越えた水により完全に水没した。第九回山崎農業賞を受賞した大八洲開拓農業協同組合（以下組合）も、昭和三十四年の大水害以来もっとも大きな被害を受けた。すなわち水田百十ヘクタール、畑百三十ヘクタール（河川敷を含む）のうち実に七二%の耕地が水没した。昨年八月の台風十五号でも冠水しており、二年連続の打撃である。

八月三日午前組合事務所で、高橋組合長から被害についてお話を伺い、事務所の小野寺さんに現地を案内していただいた。六百ヘクタールの水面は予期以上に大きく海のように感じられた。茶褐色に濁った水は雨に打たれ、傘を吹き飛ばす



林 尚 孝

ような強風で白く騒いでいた。流作地区に通ずる鬼怒川の堤防道路には、運び上げられた家具や自動車、農業機械がずらりと並んでいた。

流作の酪農家十七戸中三戸を除いた牛舎は全部冠水し、堤防上をホルスタインの大群が占領していた。雨と風に打たれながら牛は悲しそうな眼をして黙々と草を食べていた。流作公民館の広場も道路と同じように自動車とトラクターなどで埋め尽され、その一角に簡易搾乳所が設けられていた。流作以外からの応援もあり、大勢の組合員が雨合羽姿で手際よく働いておられるのを見て内心ほっとした。

利根川の水位が溢流堤を越したのが二日午前十一時頃であり、溢流は十八時間に及んだ。最大溢流深は一、二mに達し、遊水池の水位は溢流堤高さに達した。組合関係の冠水面積は水稲八十六ヘクタール、飼料畑等（含河川敷）八十七ヘクタールに及んだ。

高橋組合長は、水稲一億円、酪農関係一億円の被害と概算しています。水稲関係は共済金によりある程度補償されますが、牧草はそのような補償はまったくない。昨年の冠水はサイロづめの後だったけれど、今回は三週間早い冠水で全くサ

イロづめはできなかった。当面の粗飼料をどのように確保するかが大問題だが、組合として全力を挙げて努力したいと話された。

流作では三メートル嵩上げて建てた住居も床下浸水十一戸、床上浸水六戸が被害を受けた。それにしても組合員の連帯意識は高く、乳牛の誘導、施設の撤去など整然と手際よく行われた。

八月七日、ほとんど水の引いた流作地区水田を鈴木専務にご案内いただいた。ほとんど水が引いたといっても標高の低い浅間山区や一部流作地区ではまだ冠水していた。トドロキワセとコシヒカリはちょうど開花期に当っており全滅した。日本晴は穂孕み前だったので秋にならないと被害の程度は分らない。デントコーンはじめ飼料作物は全滅したのでこれからでも間に合うものを探して作付したい。乳量のほうは今のところ四割減である。水圧によりサイロが三本壊れたなどという具体的なお話を伺った

利根川には田中、菅生沼両遊水池の他に渡良瀬第一、第二、第三遊水池がある。田中、菅生沼遊水池には民有の農地があり、県営事業で基盤整備が行われている。渡良瀬第二には官有の農地があり、河川敷と同様に占用許可を受けて耕作が行われている。河川敷での水害は止むを得ないとも考えられるが、美田と化した遊水池での被害、それも二年連続の水害に

遊水地	溢流堤 Y P	溢流堤長	面積	貯蔵量
菅生	12,124 m	280 m	約6 k m <sup>2</sup>	約2,700万ト
田中	10,054	450	約12	約7,000

は疑問が残る。

本堤より三メートル低く溢流堤は作られている以上、田中、菅生両地区での水害は今後も生ずるに違いない。高橋組合長は「遊水池の中にある以上五年に一度くらい冠水は覚悟して「います」といつておられる。これまで多くの苦難を連帯の力で乗り切ってきた組合はおそらくこの水害の打撃を克服するであろう。しかしこのような水害の生じる確率を下げることは科学的に可能であるだろうし、それでも水害を生じるとすれば制度的な補償を行うことが必要であろう。

その意味において今回の水害には多くの問題がある。この道の専門家の多い山崎農研でぜひ検討していただきたいと考えている。

(林先生は現在、茨城大学農学部長)